

シンポジウム

「ロシア・中国におけるムスリム・マイノリティと国家：
20世紀政治変動期における多文化共生の実践とその課題」参加報告

櫻間 瑛

2016年1月9日、東京外国語大学にて、シンポジウム「ロシア・中国におけるムスリム・マイノリティと国家：20世紀政治変動期における多文化共生の実践とその課題」が開催された。このシンポジウムは、長沼秀幸、海野典子、矢久保典良の大学院生3氏の主導により、旧ソ連及び中国のムスリムを研究対象としている中堅・若手研究者を集めて開催された。

本シンポジウムでは、20世紀を中心とする政治変動期のロシア・ソ連、中国におけるムスリム・マイノリティと、国家との多面的な関係に着目し、主に人類学、歴史学を専門とする中堅・若手研究者の議論を通して比較検討し、多民族国家のあり方、イスラームとの共存方法について考えることが趣旨とされた。全体は3部構成とされ、第1部で、旧ソ連・東欧地域、第2部で中国に関する報告が行われ、第3部でコメンテーターによるコメントを含む、総合討論が行われた。本シンポジウムの詳細は以下の通りである。

日程：2016年1月9日（土）

会場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

共催：イスラーム地域研究・若手研究者の会

中国ムスリム研究会

科学研究費補助金若手（B）「19世紀後半ロシア帝国統治下ムスリム社会の家族社会的
研究」（研究代表者：磯貝真澄、課題番号：24720327）

企画代表者 長沼秀幸

副代表者 海野典子、矢久保典良

アドバイザー 森本一夫（東京大学）

【プログラム】

開会の辞・挨拶 太田信宏（東京外国語大学 AA 研）
趣旨説明 長沼秀幸（東京大学大学院）

セッション I 「ソ連・ロシアとその周辺」

司会 海野典子（東京大学大学院）

報告 1 磯貝真澄（京都外国語大学）

「ソ連初期ヴォルガ・ウラル地域におけるウラマー、ムスリム・コミュニスト、東洋学者」

報告 2 櫻間瑛（日本学術振興会特別研究員）

「異民族同化の先兵か、啓蒙の聖人か？—現在の非ロシア人から見る N. イリミンスキーの
宣教活動への評価と民族意識」

報告 3 松前もゆる（盛岡大学）

「体制転換後のブルガリアにおけるマイノリティ政策とムスリムの生活戦略—イスラーム、
ナショナリズム、トランスナショナリズム」

報告 4 野田仁（早稲田大学）

「ムスリムか遊牧民か？—清末のカザフ遊牧民統治」

セッション II 「中華民国・中華人民共和国とその周縁」

司会 矢久保典良（慶應義塾大学大学院）

報告 5 中西竜也（京都大学）

「日中戦争期中国ムスリムとウンマ」

報告 6 小野亮介（慶應義塾大学大学院）

「匪賊、闖入者、エージェント候補としての新疆カザフ難民—中国、インド、アメリカの
視点から」

報告 7 澤井充生（首都大学東京）

「「愛国愛教」を叫ぶムスリムたち—現代中国の宗教政策と清真寺の自律性」

セッション III 「総合部会」

司会 長沼秀幸

コメント 1 吉澤誠一郎（東京大学）

コメント 2 鶴見太郎（埼玉大学）

質疑応答、総合討論

総括コメント、開会の辞 長沼秀幸

以下、本シンポジウムの報告・議論の様子について簡単に紹介する。

第1部最初の磯貝報告では、ソ連初期のヴォルガ・ウラル地域におけるムスリム代表者と当局の間、及びそれぞれの内部における相互関係が取り上げられた。この報告では、特に当局及びロシア正教徒をマジョリティとし、ムスリムをマイノリティとする二項対立図式が不適切であるとして、身分や世代の問題の重要性が示された。具体的には、帝政末期からソ連初期にかけてのアラビア文字写本の収集・保存問題を取り上げ、その中で見られたムスリム知識人内部の世代の差、東洋学者との協力、ボリシェヴィキ当局との緊張感ある関係などを示し、個別具体的な関係を見るべきであることが示された。

続く櫻間報告では、同じくヴォルガ・ウラル地域において、帝政末期の現地諸民族への宣教政策に改革をもたらしたN. イリミンスキーの活動に対する、ソ連期から現代にかけての評価の変遷が示された。特に、ムスリム・タタールにとって、イリミンスキーの活動は強い批判の対象であり、その批判を通じて民族的・宗教的な自己主張を行っているものの、その主張のあり方は、ソ連・ロシアという国家のイデオロギーを踏まえ、それとの整合性を図る様な形で変化していることが示された。

次の松前報告では、現地調査に基づき、ブルガリア語を母語としながらもイスラーム的慣習を受け継ぐ「ボマク」と呼ばれる人々を対象に、ブルガリアの体制転換後のマイノリティ政策とそれに対する人々の戦略を明らかにした。実例として、女性の装いの選択、新たに赴任したイマームへの対応などが挙げられ、従来強調されていた、居住地域や環境による差異に留まらず、個人による選択・生活戦略が存在していることが示された。

第1部最後の野田報告では、清末期のカザフ認識について、清王朝当局とカザフ自身の認識を照らし合わせながら検討された。特に清側が、カザフをムスリムとみなしていたか、遊牧民とみなしていたかが一つの論点として示された。さらに、後者の遊牧性に関し、清側がロシア領カザフとの連続性を意識していたのに対し、実際には連続性は強くなかったことも指摘され、清当局による認識とカザフの実態との齟齬があったことも明らかにされた。

第2部に移り、最初の中西報告では、日中戦争期の中国ムスリム知識人たちが、「中華民族」への帰属を維持しつつ、国際的なウンマをいかに意識していたのかが論じられた。まず、「ウンマ」の中国語訳の変遷から、この概念の解釈の幅と、ムスリム知識人の苦心が跡づけられた。また、雑誌『月華』で展開した抗日闘争を「防衛ジハード」とみなす議論も分析された。これにより、同時期の中国ムスリムのウンマに対する態度の変化が詳細に論じられた。

続く小野報告では、人民解放軍の新疆進駐以降、当地を離れ、カシミールへ逃れたカザフ難民に関し、中国、インド、米国が示した態度が分析された。中国共産党は、この集団を「匪

賊」として非難し、インド政府は当初入境を阻止しようとしたものの、失敗に終わると黙認する方針に変更したことが示された。こうした当事者たちの対応に対し、米国は積極的にこのカザフ難民を中国・ソ連に対抗するためのスパイとして利用することを構想していたことが、英国の文書館史料を基に明らかにされた。

最後の澤井報告では、現地調査に基づき、中国の宗教政策に対して、清真寺においてムスリムがいかなる態度をとっているのかが示された。中国政府は、清真寺を通じてムスリムに対する管理を強化しようとしているのに対し、そこに集うムスリム自身は、一方で愛国などを強調し、それに従っている態度も示している。しかし、同時に風俗習慣としてメッカ巡礼のようなイスラーム実践を行ったり、政府派遣の役人をあからさまに無視する態度を示すことで、一定の自律性を維持しようとしている様子が紹介された。

これら各報告を受け、最後の総合討論では、まずコメンテーターによるコメント、質問が行われた。吉澤は中国関連の報告を中心にコメントし、特にムスリム内部の差異に目を向ける必要性を強調した。また民族の差異との重なりと相違、イスラームの国際性との関係などの重要性も提示された。さらに、イスラームに熱心ではない「ムスリムくずれ」とも言い得る人々にも注目することが必要ではないかと提起された。

続いて、鶴見から主に旧ソ連・東欧に関する報告に対してコメントが行われ、まず「マイノリティ」という概念の吟味が唱えられ、特に中国、旧ソ連圏ともにムスリムが多数となっている地域をどう捉えるべきかが問われた。また、やはりムスリム内部の問題として、特に世代差の問題が指摘された。さらに、ムスリムが多数派を占めている中東地域と比較して、旧ソ連・中国のムスリムが自身をどう位置付けているのかということが問われた。

その後、フロアにも開かれた形で討論が行われた。ここでも、「ムスリム」を対象とする意味と、「マイノリティ」という概念の扱い方が議論の中心となった。特に、どのような集団をいかなる基準で「マイノリティ」とみなすべきかといった問題が提起された。これに対し、主催者側からは「イスラーム中心的なものの方」を再考することが一つの目的であったと回答しつつ、より方法論的な洗練をする必要性を再確認した旨が述べられた。その他、「ネーション」という西洋由来の概念の対象地域における有効性、「宗教」という語が含み得る意味、及びその範囲等について考慮する必要性も指摘された。

本シンポジウムには、会場に入りきれないほどの多くの参加者があり、関心の高さが窺われた。近年は、旧ソ連圏、中国共にその内部のマイノリティ研究が盛んになっており、特にムスリムはその中心的な対象として、歴史学や人類学を始め、様々な観点からの研究が行われている。本シンポジウムは、そうした傾向に棹差すべく、この2地域を並べ比較することで、一つの方向性を模索する試みであったと言えるであろう。議論の中では、これまでの両地域におけるイスラーム研究の蓄積を踏まえ、むしろより内部の多様性に目を向ける必要性

が強調された。もっとも、鶴見も指摘したように、この2地域と中東のようなムスリムが圧倒的に優勢な地域との比較の観点を導入することで、両地域の共通性などがよりクリアになるのではないかという印象を持った。

また、非常に多くの来場者を集めたのに比して、個々の報告に関する質問や討論の時間が十分に取れなかったようにも感じられた。報告者の多くが報告時間をオーバーしたのが1番の原因ではあろうが、個別の報告についての議論があれば、より全体像に関する議論も深めることができたかもしれない。

とはいえ、全体としてみれば非常に盛会で、両地域の研究の現状を共有する上でも、とても意味のある研究会であったと言えるであろう。このシンポジウムを企画・立案し、半年以上前から緻密に準備をされてきた、長沼、海野、矢久保の3氏には心から感謝申し上げたい。まだ大学院生ながら、この様な充実したシンポジウムを成功裏に実現に導いたことについて、非常に頼もしく感じるとともに、3氏の今後のさらなる活躍も願いたい。

(日本学術振興会特別研究員 PD)